

歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



- ◆「長谷堂合戦図屏風について一軍記と屏風一」
- ◆慶長出羽合戦の褒賞としての名刀正宗
- ◆参加者の声 こども講座
- ◆研究余滴 一枚の史料

No.16
2009年3月発行



最上義光歴史館

「長谷堂合戦図屏風について―軍記と屏風―」

宮 島 新 一

近世に入ると合戦図は、時間の経過を追って場面が展開してゆく絵巻から、戦場の地形や展開する部隊を描くのに適した大画面、すなわち、屏風へと形式が変わってゆく。中には関ヶ原合戦図屏風（大阪歴史博物館）や、大阪夏の陣図屏風（大阪城天守閣）のように合戦後さほど間をおかずに描かれた図もあるが、多くは時がたつてから回顧的な視点によって描かれたものばかりである。回顧的といってもそこには明確な制作の目的があった。目的は二つある。一つは家祖の軍功を図化して世間に明らかにすることである。軍功の誇示は合戦の美化につながる。もう一つは、敵味方が入り乱れて戦うために実情がわかりにくい合戦の状況を可能な限り調べて記録しようとする姿勢である。それが文章で表現されれば「軍記」となり、絵画化されれば「合戦図」となる。

文章はより事実近く、絵画はより

遠いと思われがちだが、どちらにしても脚色は避けられない。その点で両者は同等、同格であり、事実よりも意図を読み取るように心がけたい。長谷堂合戦図は基本的に最上軍の戦勝場面のみが描かれ、落城した畑谷城は描かれておらず、援軍として参陣した伊達勢はまったく無視されている。登場する武士の数は少なく、制作依頼者は軍勢の配置には関心がなかったことがわかる。同様に地形も無視されている。紀州本や米沢本「川中島合戦図」のように軍師の指導によって制作された合戦図とは性格が異なる。

本図は秋田の戸部一愍齋正直が元禄十一年（一六九八）正月に著わした『奥羽永慶軍記』に基づくとされるが、画中に記された人名を子細に検討すると同記の内容とはかなり違っている。中には軍書や記録に名前を見いだすことができない者も多く含まれており、オリジナル性が強い。かつては絵解き

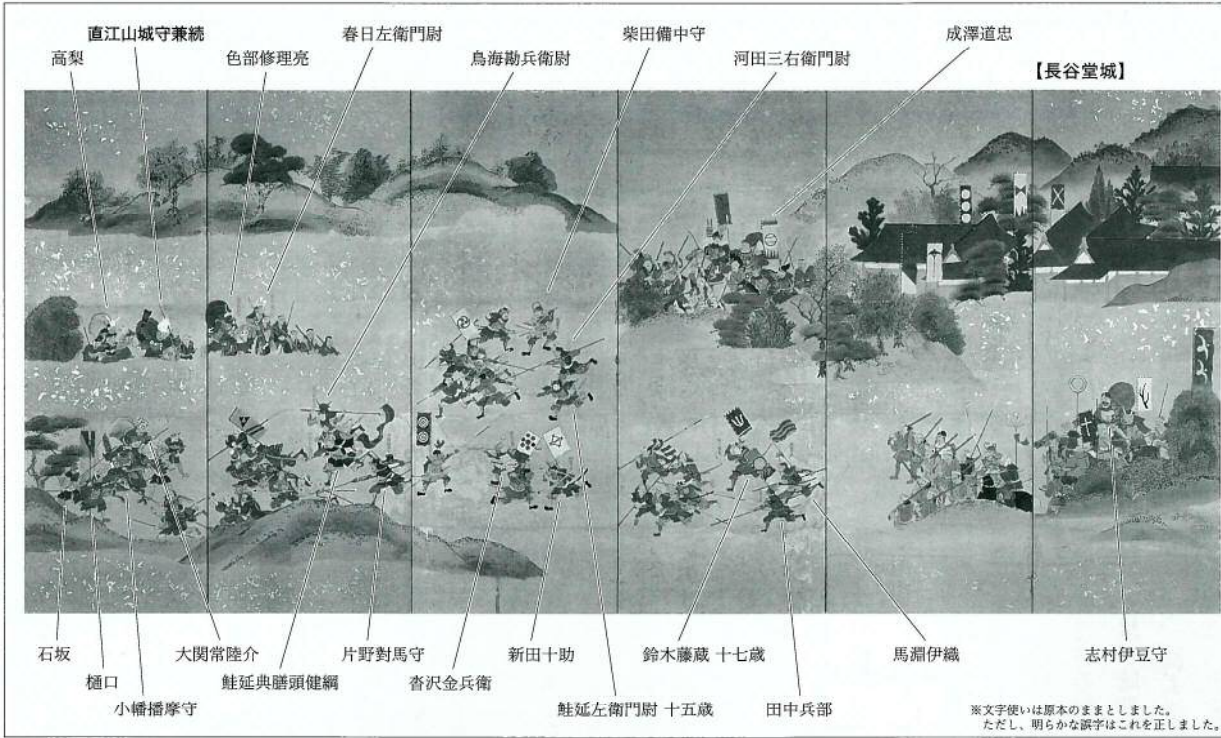
用の台本があったのかもしれない。また、人名が直か書きであることを考慮するならば、書き込まれた時期は制作当初と考えてよいだろう。

向かって右隻の中心場面は前哨戦の一つで、『奥羽永慶軍記』では「鮭登茂綱会津勢を襲う」とされる段である。同記には鮭延方の軍勢として多くの武士が登場するが、画中の人名で共通するのは「鳥海勘兵衛尉・鮭延典膳頭健綱・杵沢金兵衛・新田十助・鮭延左衛門尉十五歳・鈴木藤藏十七歳」などごく一部に限られ、しかも、同記には登場せず、かつ、出典を明らかにできない「片野對島守・田中兵部・馬淵伊織・柴田備中守・河田三右衛門尉」などの名がつけ加えられている。このうち「鮭延左衛門尉・河田三衛門尉」の二人の名は別筆である。一方、上杉勢では大関常陸介や小幡播磨守のほかに、「石坂・樋口」の名が記されている。上杉系の『越境記』を母体にした『最

上合戦記』などには「石坂勘右衛門討ち死に」とある。また、「樋口」は言うまでもなく直江兼続の生家の苗字である。

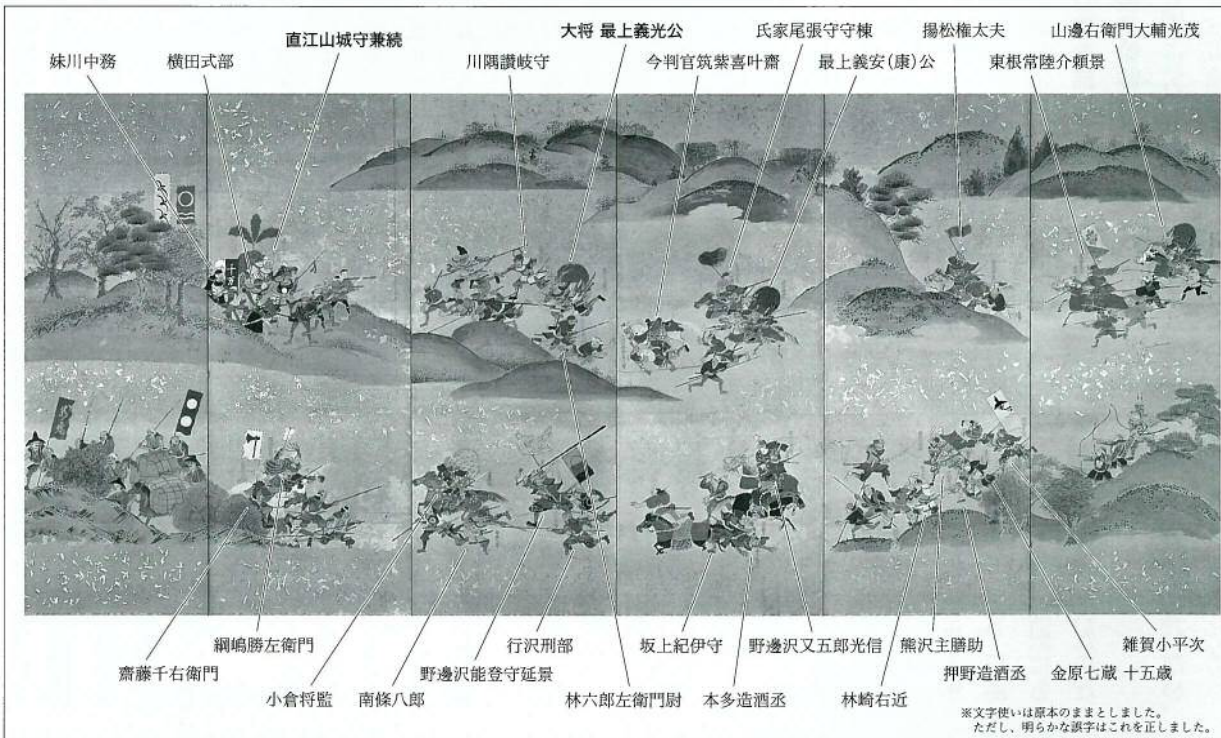
こうした戦闘場面とは別に右上隅の建物群の前に「成沢道忠」の名のみを記した部隊が描かれている。この挿話は『奥羽軍談』（佐久間昇氏の解説によれば宝暦初年に上林職広が増補）にしか見えない。同書に畑谷落城の知らせを聞いた最上義光が三之丸の飯塚口に成沢道忠らを警固に出した、とあるのに一致する。とすると、背後の建物群は三之丸の武家屋敷ということになる。だが、小山に囲まれている様子からは平城の山形城とは考えにくく、山城の長谷堂城とするのがふさわしい。予定を変更して成沢道忠を登場させたための矛盾だろうか。肝心の城主「志村伊豆守」の一隊はというと建物の下方、画面の端にあつて、城との関連性が希薄である。左上隅の上杉勢本隊には「直江山城守兼統・色部修理亮・春日左衛門尉・高梨」の名があるが、『奥羽永慶軍記』に登場しない「色部修理亮」は保科家臣の向井新兵衛吉重が寛文二年に脱稿し、延宝元年に浄書した『会津四家合考』などに見え、「高梨」については、延宝八年の自序をもつ『近代軍記』（黒川真道編『上杉三代軍記集成』所収）には第五陣に「高梨兵部」

長谷堂合戦図屏風 右隻



※文字使いは原本のまましました。
ただし、明らかな誤字はこれを正しました。

長谷堂合戦図屏風 左隻



※文字使いは原本のまましました。
ただし、明らかな誤字はこれを正しました。

とある。

向かつて左隻は、上段に合戦全体の中心となる最上義光勢と直江兼続勢の主力部隊による戦闘が描かれている。『奥羽永慶軍記』卷三十二には最上義光をはじめとして多数の一族、郎党や仙台からの加勢が列挙されているが、図と共通するのは嫡子「最上義安公」と「筑紫喜叶齋」および、「川隈讚岐守」(『奥羽永慶軍記』では川熊安芸守)・山邊右衛門大夫光茂(同じく山部右衛門尉)だけである。なお、右方に見える「揚松権太夫」は『上杉家御年譜 御家中諸士略系譜』の延宝く正徳年間に「上松権太夫」の名を見いだすことができるうえに、後ろを振り返る顔の向きからみて、敵陣に取り残された上杉方であろう。

下段の左半は上段に続く光景で、関ヶ原の合戦で西軍が敗れたとの情報を得た上杉勢が軍を返すのを最上勢が追撃する場面である。荷駄は別として上杉勢の殿軍が戦う姿勢を見せている点に注目したい。上杉方には「綱嶋勝左衛門・斎藤千右衛門・小倉将監・南條八郎」などの名が記されているが、いずれも『奥羽永慶軍記』には出てこない。『上杉家御年譜 御家中諸士略系譜』によれば、綱嶋勝三郎という者が慶長十九年の大坂出陣に加わっている

ことや、小倉将監宗信が直江兼続より少扶持を賜り、南条八右衛門が慶長十三年に米沢に帰参したことがわかるので、家中の何らかの情報に基づいているのだろうか。

問題は右半の、前哨戦の一つである上山合戦の場面である。ここにも出典不明の人名が認められるが、諸書では中心となるのは坂弥兵衛が穂村造酒丞を、金原七蔵が上泉主水正を討ち取る場面である。しかし、図では「金原七蔵」が「押野造酒丞」を、「坂上紀伊守」が「本多造酒丞」を討つように描かれている。この組み合わせは他に例をみない。通説に反して上泉主水正を「押野造酒丞」に変えるにはさうとうな裏づけが必要と思われるが、討ち手や死に場所に諸説あることに配慮したのかも知れない。より強調したいことは、上山合戦に坂上紀伊守を登場させるのは上杉系の『近代軍記』のみ、という点である。とりわけ『奥羽永慶軍記』では「本多造酒介」を討った者は「遠藤小一郎」となっており、図が同記に基づかないことは明らかである。

こうした人名の不一致は本図と『奥羽永慶軍記』との関連性を疑わせる。もともと『奥羽永慶軍記』は写本が少なく、広く流布していなかったため参照した可能性は乏しい。そうであるな

らば、本図の描き手を著者である戸部一愨(閑)斎とする伝称もあらためて見直す必要がある。伝称の根拠は、本図を入れる箱の側面に「戸部一閑之画屏風一雙入 明治貳拾五年辰八月吉日記 湯沢町斎藤氏」、蓋裏に「戸部一閑之画最上合戦之図一雙入」とある墨書による。また、これとは別筆で蓋の前面に「斎藤五左衛門」とある。斎藤家の当主は代々五左衛門と称していたが、遅くとも安政二年までに「左太夫」と名乗りを変えている。もし、図と箱が一体のものであるならば、屏風は江戸時代末には現在の所蔵者のもとにあったことになるが、筆者の伝称がそのままでさかのぼるかは不明である。

戸部一愨斎が絵を描いたことは戸部家に「戸部式愨」の印章をそなえた水墨画の「船子夾山図」が伝わり、地元の湯沢市や横手市に涅槃図が三幅現存することから事実である。ただし、いづれも仏画、禅機図といった宗教画に画題が限定されていることに注意したい。なお、やはり戸部家に伝わり、一愨斎筆とされる源平合戦を描いた屏風は彼より早い時期の職業絵師の手になるもので、同人の作品ではない。「長谷堂合戦図」の筆致には町絵師らしい手慣れたところがあり、一愨斎の余技になるとは考えられない。その単純化

された樹木や山野の表現には板本挿図、人物には初期の役者絵からの影響が認められる。一般に町絵師の作品は制作年代の判定が難しいが、上限は宝永四年(一七〇七)十二月に亡くなった一愨斎の晩年に重なる可能性がある。だが、彼が亡くなる直前の同年四月に描いた湯沢市・善龍寺の涅槃図の老筆ぶりと比べると「長谷堂合戦図」の筆致は若々しく、同じ人物の手になる可能性はない。一方、下限は十八世紀中頃といったところだろう。

実は、本図が長谷堂合戦を描いた図であることが判明したのは、湯沢市の文化財としてその存在が世に知られるようになってからで、比較的近年のことである。それまでは湯沢の小野寺氏と最上勢が戦った「有屋峠合戦図」と称されていた。いったん主題が忘れ去られていたという事実や人名に別筆が若干加わっている点は、制作主のもとを離れてからある程度の歳月と幾人かの手を経たことを物語っている。戸部一愨斎筆という伝称は本図が湯沢にもたらされた後から付け加えられたのだろう。

本図は山形で制作されたに違いない。鮭延氏の活躍や喜伴斎の討ち死など、図の骨格は最上系の軍記に取材している。ただし、随所に独自の調査のあと

が認められ、流布する軍書に基づかない、まったく独立した作品と言える。とくに上杉系の資料を積極的に取り入れている点は重要で、制作主はそれらを手でできる立場にあったらしい。どの軍記にもない、坂上紀伊守が敵将を組み伏せる場面が下段の中央に描かれている点に注目するならば、合戦後に長谷堂城主となった坂(坂上)紀伊守光秀ゆかりの者を制作主として考えるのも一案だろう。興味深いことに、坂氏一族には最上家改易後に上杉藩士となった者がいる。

(本文を草するにあたっては斎藤茂美氏、戸部尚武氏、善龍寺御住職の多大なご協力を得ました。皆様に感謝します。)

略歴

宮島新一

(みやじましんいち)

一九四六年愛知県生まれ。文化庁、京都・奈良・東京・九州国立博物館などを経て、二〇〇〇七年から山形大学教員。研究分野は日本絵画史。

著書『武家の肖像画』至文堂

日本の美術シリーズ(一九八)

共著『画壇統一に賭ける夢』文英堂

(二〇〇二)

『戦国合戦絵屏風集成』(川中

島合戦図・賤ヶ岳合戦図)長

久手・長篠合戦図)中央公論社

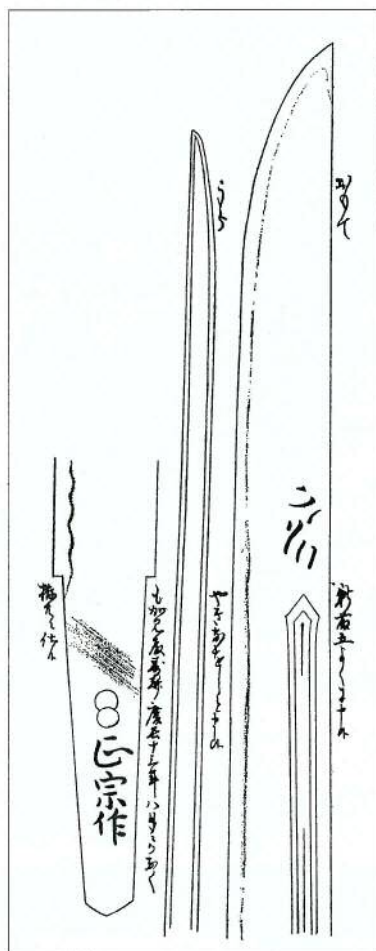
(一九八〇〜八二)

慶長出羽合戦の褒賞としての名刀正宗

布施 幸一

現在、「正宗」在銘の大黒と号する短刀がある。これが最上義光が長谷堂合戦を主とする上杉勢との戦いの武功によって徳川家康から下賜されたものであると見なされる。

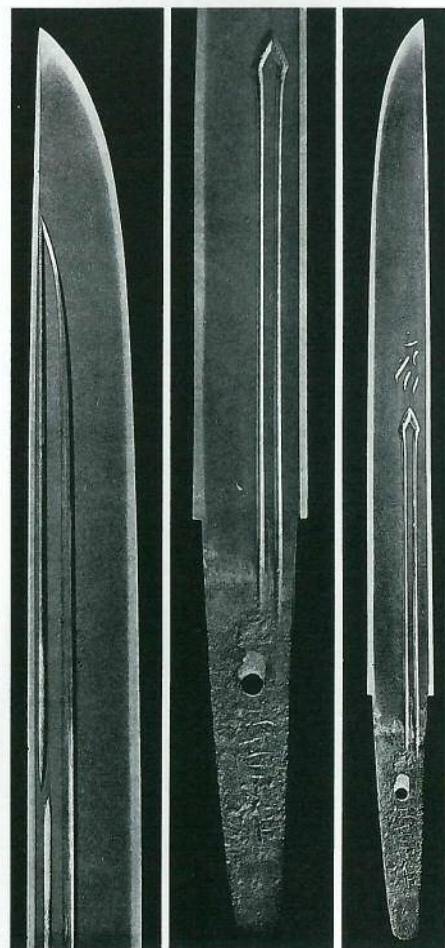
それは『最上氏関係資料』に目を通していく過程で、この短刀に同定されると思われる記事が目につく。先ずは『最上家譜』には、慶長六年（一六〇一）四月に、前年の上杉との合戦の武功忠義による恩賞として、義光が家康から「正宗の御刀」を拝領している。また、「寛政重修諸家譜」の『最上氏系図』や『最上家伝覚書』にも同様の記事があり、その時下賜された品が「正宗の御脇差」であったと記している。



『埋忠押形』所載の最上家所蔵「正宗」の短刀

は考えられないから、「刀」を誤記と見なし、「脇差」つまり今に言う短刀であったと解して差し支えないだろう。本刀は『埋忠押形』なる刀剣資料に、最上家所蔵として記載されているものである。この資料は、慶長（一五九六）から慶安（一六五二）にかけて、京都の金工家埋忠家（明寿・寿齋・明甫）が扱った刀剣金具類にまつわる刀身の押形、つまり現物の実写図である。

この中心（茎）図には「正宗作」と三字銘があり、その両脇に「も加見（最上殿）壽齋 慶長十三年八月二かなく（金具）拵共二仕候」という記載がある。これによって、慶長十三年（一六〇八）八月、埋忠壽齋が最上家から預かっていた正宗の短刀に、さまざま金具類や拵を調製したことが窺える。拝領の正宗は、家康ゆかりの品として最上家の宝物の一つとなり、七年あ



短刀 銘 正宗作（大黒正宗）
刃長 九寸四分（約28.5cm）

まりを経て金具や拵を新調したのであろう。そして少なくとも、山形最上家が健在の間は本刀が献上品となったり、移動したりした形跡は窺えない。ところが、この正宗はいつの頃からか「大黒」を冠するようになり、譜代大名の堀田家が所蔵することになった。その後、昭和に入って民間人の手に渡り現在に至っている。

「大黒」の号の由来は分からない。正宗の短刀の中では大ぶりであることは確かである。あるいは、七福神の一つ大黒天が福徳を招来する神であるという、信仰上の意味合いの呼称であろうか。

正宗は鎌倉時代末期（一三一〇〜一三三〇）に活躍した、相模国（神奈川県）鎌倉の刀工である。室町時代から名工として注目されてきたが、信長・秀吉・家康と時代が下がるにつれ、しだいにその名声が高まっていった。家康の遺品の分配台帳である『駿府御分物刀剣元帳』には、家康の遺品として十八口もの正宗が記載されている。中でも、有力大名からの献上品も目立つ

ており、秀吉の時代より一段と正宗が重宝されていることが分かる。

したがって、家康から拝領の正宗は、義光の勲功に対する最大級の返礼であったと見てよいだろう。ともかく、正宗となると、「正宗の宗家（一族の中心となる本家や嫡流）」という意味合いも加わって、各大名家を中心に贈答用（献上品）としてだけでなく、守り刀や家宝として珍重されてきた。また、そのような評価の高さを反映して、江戸時代から現代に至る多くの刀工たちが、正宗を目指して作刀してきたのである。現存する正宗のうち、正真の在銘品は極めて少ない。管見によれば本刀の他に、短刀が四口、刀が一口を数えるのみである。あとは無銘の物を鑑定家本阿弥家が正宗と極めたものである。この本阿弥家もまた、正宗の評価を高めるのに一役買っていた。江戸時代には、真偽入り乱れて多くの正宗が存在したものと思われるが、鑑識眼の向上につれて淘汰されてきたのである。（財団法人日本美術刀剣保存協会会員）

こども講座

参加者の声



よろいを着たよ

山形市立出羽小学校
森谷 涼太

ぼくは、本物のよろいを着れると聞いて、とてもわくわくしました。はじめて見たよろいは、とてもかっこよく、着てみると、とても重くて動きづらかったです。館内を歩いてみましたが、あまりにも重くて、とちゅうまで歩いたけどすぐにもどってきてしまいました。昔の人は、こんなに重いよろいを着て、たかっていたなんて、すごい力もちだったんだあと、感心しました。



いねー。」と言われて、とてもうれしかったです。今度は、もっとうごはんをたくさん食べて力をつけて、よろいを着てみたいです。

昔の香ぶくろ作り

山形市立第二小学校
伊藤 佐和子

二種類の香ぶくろを作りました。家庭科でしつけのぬい方を教えてもらっていたので、思ったより上手にできました。学校でみんなに「すごいね。」と言われてちょっとうれしくなりました。自分で手ぬいたわたしたちだけの香ぶくろ。大切に使おうと思います。

フェルトで編みこんだもう一つの香ぶくろも楽しかったです。こんな作り方は初めてでした。みんなが好きな色を選べたのでいろんな作品になりました。

最上よし光は社会の授業でできましたが、「こども講座」に来て、昔の人は大変だったことを知りました。戦争に行かなければならなかったり、長い間お風呂に入れないのがまんして香ぶくろをかぶとの中に入れてが



んぱったりしていたからです。わたしは今の時代に生まれてこれて良かったと思いました。

初めて聞いた「銘きり」

山形市立村木沢小学校
向田 翔太郎

「今日は、最上義光歴史館に行くぞ。」とお父さんが、言ってきました。ぼくは、なにをしに行くのかなと思いつつ車に乗って義光歴史館に行きました。

義光歴史館に入って、十分くらいたつてから「銘きり教室」が始まりました。ぼくは「銘きり」という言葉を初めて聞きました。むずかしい言葉だけれども、先生が、親切に教えてくれたので理解できました。

まず先生の手本を見て、鉄板に練習しました。最初は「一」と「十」を彫りました。「二」と「十」は簡単に出来ました。しかし、「土」や「水」は、画数が多く、文字が複雑で、とてもむずかしかったです。そしていよいよ、本番の銅板に自分の

名前を彫りました。でも画数が多いので、小さくなってしまいました。でも「銘きり教室」に参加して、すごく楽しかったです。来年も、このような教室があったら、また参加したいと思っています。



平成20年度 事業及カツプ



○歴史講座「武士[mononfu]の晴れ姿を体験しよう!!」
なりきり騎馬武者大集合!!本物の馬に乗って
武士の晴れ姿を体験しました。



○史跡めぐり「最上義光vs直江兼続」
～慶長出羽合戦ゆかりの地をめぐる～
長谷堂城城山山頂にて



○大河ドラマ天地人山形県推進協議会主催「天地人まつり」(10月25日)
“かねたん”と仲良くインタビューに答える!?最上義光に扮した渡邊館長。



○甲冑着用体験コーナー
甲冑姿の凛々しいママと笑顔が素敵なパパ!!
家族でバチリ!!



※最上義光歴史館の最新情報は公式ホームページをご覧ください。
<http://mogamiyoshiaki.jp>



○海外のペパクラマニアからも評価された武将兜のペパークラフト。
型紙は歴史館のホームページから無料でダウンロードできます!!

平成20年度事業

◆◆◆◆◆
○常設展示Ⅰ(4月1日～同月15日まで前年度継続)

○寄贈記念特別公開「最上公義氏寄贈資料」

○常設展示Ⅱ(4月15日～7月13日)

○「鐵」[Kurogane]の美(2008)～刀の裏側をみる～

銘切りの実演(5月4日) 会場/最上義光歴史館内ロビー

刀匠/高橋恒敏氏 会場/最上義光歴史館展示室

ギャラリートーク(5月5日) ナビゲーター/布施幸一氏

○常設展示Ⅲ(7月15日～10月13日)

○「四季の草花」～屏風絵にみる日本の四季～

○常設展示Ⅳ(10月15日～1月12日)

○「武士」[mononfu]の晴れ姿

○企画展(1月14日～4月12日)

○「市民の宝モノ」2009

○歴史講座(11月1日・2日・3日)

○「武士」[mononfu]の晴れ姿を体験しよう!!

内容/騎馬武者体験イベント 会場/最上義光歴史館前広場

○史跡めぐり(11月15日)

○「最上義光vs直江兼続」～慶長出羽合戦ゆかりの地をめぐる～

歴史館(受付・見学)↓上山古戦場(大將塚)↓荒砥城跡(八乙女

八幡神社)↓畑谷城跡(城山・長松寺・念仏壇、たらたら清水など)・

昼食↓長谷堂古戦場(釜沢山・長谷堂城山・主水塚など)↓歴史館着

講師/片桐繁雄氏(上市市立図書館館長)

○歴史講座

○最上義光歴史館サポーター第二期養成講座「義光塾」

1月22日「大名最上氏と山形の歴史」 会場/最上義光歴史館

1月29日「最上義光の人物像」 講師/横山昭男氏

2月5日「最上家と山形城」 講師/片桐繁雄氏

2月12日「文化財鑑賞の基礎知識について」 講師/齋藤 仁氏

2月19日「最上義光歴史館見学の引き」 講師/加藤千明氏

3月1日「昔の物の重さを量ってみよう!!」 講師/揚妻昭一郎

3月8日「布で『香袋』を作ってみよう!!」 講師/棚井美果

3月15日「刀匠になってみよう!!」 講師/高橋恒敏氏



